

演 題	コロナクラスター襲来
副 題	再び迎えた危機とその後

フリガナ	イチノミヤケアセンター
施 設 名	いちのみやケアセンター
フリガナ	カイゴフクシシ アメミヤヒロキ
発表者（職名・氏名）	介護福祉士 雨宮弘樹
フリガナ	ショクインイチドウ
共同研究者	職員一同

**【はじめに】**

昨年度の本老健大会で、新型コロナ感染対策に関する当法人の取り組みと各事業における感染状況について検討し、老健の入居サービスにおけるクラスター発生を阻止できている現状を報告した。しかし、5月には5類への移行が予定されていた今年2月18日（土）に複数の抗原検査陽性者が確認されると、20日（月）までに入居者41名、職員8名が陽性となるクラスター事態が発生し、最終的には無症状も含めて入居者78名にPCR陽性が確認された。県の対策チームの指導を得て、比較的重症の4名が入院治療を受けたが、その他の入居者は施設内での治療となり、いずれもさらなる重症化には至らず、全員のPCR陰性2回確認をもって3月13日にクラスター収束とした。クラスターを阻止し得なかった原因について考察するとともに、クラスター収束直後に実施した職員アンケートを分析して今後の対応策の見直しを検討したので報告する。

**【アンケート調査とその結果】**

クラスター収束直後に実施した職員アンケートはBCP等に記載された初動対応の理解度や実度、職員間の情報伝達、家族への情報提供、日々変化する状況と現場の指示命令系統、対策備品の充実度、業務変更や勤務変更、対外連携や人員補充などについて、各職員の思いや改善意見について調査した。初動対応の理解度は、ほぼ全員が理解できていたと考える職員は23%に留まり、一部に誤って理解があった、は43%、残りは理解不足との回答であった。また、昨年発表において感染の施設内侵入防止に最も有効と考察した迅速な情報の共有は、クラスターにおいても有効と考える職員は多くいたが、時々刻々と変化する状況に応じた指示命令系統の情報伝達はその正確性や詳細度について不十分であったとの意見も比較的多く見られた。備品の備蓄については増やすべきとの意見も見られたが、大幅な不足や枯渇は生じていなかった。行政や他施設との連携、人員の補充に関する協定などへの理解は十分に進んでいないものと思われたが、今回のクラスターでは

保健所や県の対策チーム、連携病院のサポートに安心を感じた職員も多くみられ、連携強化を望む声があった。一方、職員不足が生じた場合の臨時職員の導入には、法人内の協力にとどめるとの意見が多く、一部には臨時職員導入はかえって混乱を招くといった考えも示された。

**【まとめ】**

新型コロナ流行初期に作成した感染対策マニュアルやBCPが、変異株の影響もあって必ずしも有効に活用されなかった側面もあるものの、アンケート調査からも原則への理解が必ずしも満足すべきであったとはいえず、研修や訓練も不十分であったと考えられる。しかし、クラスターの中でも事態への対応に有効であったと考えられる対策は、迅速な情報共有や施設外諸機関との迅速な連携であった。今回は小幅な業務縮小で対応可能であったが、大幅に人員不足を生じた場合の対策はさらに検討が必要と思われた。

**【終わりに】**

今回のクラスターはコロナ感染症流行初期と異なり、オミクロン株が主流となった中で発生したこともあり、オミクロン株は感染率が高くなる一方で重症化率は減少したとされていたが、まさにそれを実感する状況であった。しかし、高齢者施設でのクラスターが一般社会より高リスクであることには変わりはない。今回の経験を今後の再発への備えとするために、アンケート調査で明らかとなった職員意識や情報伝達のあり方、施設外諸機関との連携強化、コロナ変異株の特性などを反映させた感染対策マニュアルやBCPの随時改定が必要であり、研修の充実も図っていきたい。